ポスト・ポスト冷戦時代の人間の安全保障

横浜国立大学
国際社会科学研究院
志賀 裕朗

人間の安全保障とは何か？

- 安全保障概念を、人ひとりひとりを重視する方向へとシフトすることを目指した概念。
- 既存の規範・制度に異議申し立てをする現状変革的な性格を有する。
  - 国家が、自国の領土や政府を軍事力によって外からの脅威から防衛することを目指す国家安全保障概念
  - 国家を単位とする経済成長を重視する開発概念

「人間の安全保障の時代」の終わり？

- 人間の安全保障概念は、冷戦終結によって国家間戦争の危険性が（少なくとも先進諸国間では）後景に退いたことを背景として登場。
- しかし、そうした時代背景は失われつつある。
  - ➢米同時多発テロと「テロとの戦争」⇒「異質な他者による脅威を、国家が、軍事力・警察力によって除去する」という安全保障観の台頭。
  - ➢大国間対立の激化⇒国家安全保障の前景化。

「我々は時代の転機（*Zeitenwende*）に生きている。
今後の世界はもはやそれまでの世界とは同じではない。
（独・ショルツ首相、2022年2月）」

人間の安全保障と国家の安全保障

- 両者が二律背反であるわけではなく、相互補完的な側面はある。
- しかし両者の緊張関係には十分留意すべき:
  - 一国内では、軍事安全保障の論理は人間の安全保障を脅かす危険性が高い。
  - 国境外の他者の安全には無関心な概念である国家の安全保障と、自国以外の人々の安全・尊厳についても関心・責任を持つというコンパッションに基づく人間の安全保障の概念は折り合いが悪い。

ポスト・ポスト冷戦時代の現実？

- 大国が国家安全保障の観点から開発・開発協力（人間の安全保障の実現）を語るように。
- 守られるべき「国家」がグローバリゼーションによって（既に）変質し、国民の人間の安全保障に負の影響を及ぼしている。
  - 主権国家の変質：市場原理重視の新自由主義の下での公共サービスの民営化・リスクの個人化とそれに伴う政治の空洞化、政治的無関心（アパシー）の蔓延。
  - 国民国家の変質：格差拡大による中間層の崩壊や社会的一体化の喪失、承認欲求充足の欠如。

人間の安全保障の回復のために

- 尊厳の回復の重要性：セキュリティは物的条件の充足のみでは実現できず、人々の不安・不満・怒りへの対処が不可欠。
- 主権国家の回復（政治の回復）
  - 尊厳の回復を通じて人間の安全保障を実現しうる最も重要な主体は今なお国家。
  - 市場と巨大企業の側に傾き過ぎた国家と市場のバランスを取り戻し、「政治」を通じて解決すべき事項を拡大すべき。
- 国民国家の回復
  - 偏狭なナショナリズムを回避し、異なる他者への寛容や苦境にある同胞への共感（エンパシー）に基づいて国民の一体感を維持するナショナリズムが必要。

リアリズムとユートピアニズム

（E.H.カー『危機の20年』（1939年）から ）

- リアリズムは、改革されるべき現状を追認する思考停止に陥る危険がある。時には理想を重視するユートピアニズムが、リアリズムのもたらす不毛な結果を防ぐために呼び出されなくてはならない。
- どうしても目的に向かって走りがちな未成年者の思考であるユートピアニズムと目的を全くしりぞける老齢者の思考であるリアリズムを巧みにバランスさせることが重要である。